

主題、哀感を帯びた第2主題を軸に劇的な展開を遂げる。

第2楽章:ラルゴ。郷愁に充ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏するおなじみの主題を中心とした主部に、美しくも切ない中間部が挟まれる。

第3楽章:スケルツォ、モルト・ヴィヴァーチェ。民族舞曲風の歯切れの良い主部に、軽く弾んだ中間部が挟まれる。

第4楽章:アレグロ・コン・フォーコ。力強く進むフィナーレ。行進曲調の第1主題が中心を成し、優しい第2主題のほか、第1～3楽章の主題も顔を出す。管楽器の伸ばした音が減衰する終結は非常に珍しい。

【プログラム 2】

ブラームス:ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.77

ドイツ・ロマン派の大家ヨハネス・ブラームス(1833-97)が残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、チャイコフスキーの各曲と並ぶ同ジャンルの代表作である。

1877年、風光明媚なオーストリアの保養地ペルチャッハで初めて夏を過ごし、交響曲第2番を生み出したブラームスは、翌1878年の夏も当地に滞在して本作に着手。盟友の大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムの助言を得ながら年末に完成し、1879年1月1日ライプツィヒにて、ヨアヒムの独奏、ブラームスの指揮により初演された。

本作は、独奏者が名人芸を誇示する、当時流行りの“ヴィルトゥオーゾ協奏曲”ではなく、独奏とオーケストラが競奏と協調を重ねて作り上げる交響曲風の性格を有している。それでいて独奏パートは、多用された重音奏法をはじめ技術的にかなり難しい。また、作曲の直前に行ったイタリア旅行の影響といわれる明るさも特徴をなしている。なお、ブラームスが記していない第1楽章のカデンツァは、ヨアヒム、アウアー、イザイ、クライスラーその他多数の名奏者が創作している。

第1楽章:アレグロ・ノン・トロppo。重厚かつ多様な管弦楽部分の後、ヴァイオリンが短調の情熱的なソロで登場。2つの牧歌風の主題を中心に多彩な変化を遂げていく。

第2楽章:アダージョ。オーボエが物寂しい旋律を奏する長い前奏で開始。その主題をヴァイオリンが受け継いで叙情味に溢れた音楽が展開され、切々とした中間部が挟まれる。

第3楽章:アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロppo・ヴィヴァーチェ。活気が漲る華やかなフィナーレ。冒頭のハンガリー舞曲風の主題を中心に運ばれる主部に、2つの副主題部が挟まれる。